

令和3年度 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立羽咋工業高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 生徒全員の進路実現のため、全教職員が、タブレット等のICT機器を日常の学習ツールとして活用し、個別最適な学びと主体的・対話的で深い学びを一体的に充実させて授業改善を実践することで、学びの質を向上させるとともに、資格取得を奨励し、生徒の学力向上に努める。	① 思考力・表現力・コミュニケーション力の向上のため、ICT機器を効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」を主とした互観授業や公開授業・研究授業に取り組む。	授業改善に向けた互観授業や公開授業、研究授業等を年間3回以上取り組んだ教員の割合が A 80%以上 B 65%以上 C 50%以上 D 50%未満	教員のうち教諭・講師29名を対象に1月にアンケート調査 3回以上 17人 (59%) 2回 7人 (24%) 1回 5人 (17%) 0回 0人 (0%) 評価：C	教諭・講師29名のうち、公開授業等を年間に3回以上実施した割合は59%(17人)と、判定基準の65%(19人)を下回ることとなった。初めて導入されたChromebook(クロームブック)の使い方に慣れていない1学期における実施が低調であったことが年間の結果にも影響した。 「一人一台端末」の環境が整う次年度は、取組を継続するとともに、「Chromebookの活用資料の作成」など、GIGA校内研修推進リーダーと教務課が連携した新たな取組を行うことなどにより、一人一台端末を効果的に活用した授業改善をさらに推進したい。
	② 学力向上を図るために、教科の宿題やレポートの出題方法と回数等を工夫するとともに、授業と資格取得の補習指導を通して、家庭等での自学自習する習慣を身につけさせる。	宿題・レポート・資格取得などの自学自習について A 十分取り組むことができた B おおむね取り組むことができた C あまり取り組むことができなかった D 全く取り組むことができなかった	生徒対象に 12月にアンケート調査 A : 65% B : 32% C : 3% D : 0% 評価：A・Bあわせて 97%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて97%と、判定基準の80%を上回り、特に「A」の割合は65%と、前年度(50%)より15ポイント上昇した。これは、生徒がテストや宿題、資格取得、コンテスト等に向けて努力している結果と考えられる。ただし、別のアンケートでは「テスト期間以外の家庭学習」に取り組んでいない生徒が28%もいるということも明らかになっている。 次年度も現在の判定基準を継続し、自学自習の習慣が確立できるように取組を進めることで、社会人になってからも主体的に学び続けることができる人材を育成したい。
	③ 毎月、図書便りを発行し全教員の「お薦めの本」を紹介するとともに、「読書週間」などの読書運動を全校的に行い、読書の習慣を身につけさせる。	個人的な読書、授業や課題研究等の学習で、図書館の書籍を A おおいに利用している B ある程度利用している C あまり利用していない D 全く利用していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A : 30% B : 22% C : 28% D : 20% 評価：A・Bあわせて 52%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて52%と、今年度の中間評価から3ポイント上昇して判定基準の50%を上回った。2学期に実施した1・3年生の「朝読書」で図書館の利用を積極的に促したことが功を奏したと考えられるが、思ったより数字が伸びなかった。これは、アンケートの質問文に「朝読書での図書館利用」が入っていなかったことが原因と考えられる。 次年度も現在の判定基準を継続し、「朝読書」をきっかけとして図書館を利用する生徒が増えるよう取組を進めていきたい。
	④ ジュニアマイスター顕彰のゴールド特別表彰およびゴールド・シルバー・ブロンズの取得を目指し、学校全体で多くの資格・検定への挑戦意識を高めて認定者数を増加させる。	ジュニアマイスター顕彰ゴールドおよびシルバーの認定者数が学校全体で A 60人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満	1月の認定者を検証 認定者数：74人 評価：A	ゴールド認定者43人・シルバー認定者31人の計74人と、A評価の判断基準である60人を上回った。コロナ禍が続く中、資格試験や検定試験は例年どおりのスケジュールで実施され、生徒は資格取得にチャレンジする機会に恵まれた。各科・各コースとも3年生をはじめと多数の生徒が技能検定等の高難度資格に合格できたことが目標達成に大きく寄与した。 令和2年度前半に多くの検定試験等が中止になったことから今年度は達成度判断基準を下げた。 現2年生も同じ状況であるため、次年度も現在の基準を継続して資格取得に挑戦させたい。
	⑤ インターンシップや地元企業説明会等により適切な進路選択を促すと同時に、進路説明会やLHなどで進路に向けた情報提供を行なう。	各種の進路指導行事・LHなどによる説明や進路情報により、意識が A たいへん高まった B ある程度高まった C あまり変わらない D 全く変わらない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A : 58% B : 40% C : 2% D : 0% 評価：A・Bあわせて 98%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて98%と、判定基準の90%を上回った。10月のインターンシップ(2年生対象)や、12月の「地元企業を知る会」(1・2年生対象)を実施できたことが要因と考えられる。なお、「地元企業を知る会」の事後アンケートでは、1年生の94%、2年生の96%が「自分の進路に役立った」と回答しており満足度が高い。 次年度も現在の判定基準を継続し、「A」の割合がさらに高くなるよう、進路指導課と学年団が連携し、進路説明会や保護者懇談会に使う「求人企業一覧表」など、進路資料の充実を図りたい。
	⑥ 進路希望の達成のために指導の充実を図る。 基礎学力の定着を図ると共に、授業でコミュニケーション力をつけさせる工夫を行う。 外部講師による講演や面接指導、全教員による個別面談・指導を充実させる。	朝学習や日頃の学習、面接指導などにより、基礎学力やコミュニケーション力が A たいへんついた B ある程度ついた C あまりつかなかった D 全くつかなかった	3年生対象に 12月にアンケート調査 A : 70% B : 28% C : 1% D : 1% 評価：A・Bあわせて 98%	3年生対象のアンケート結果は、A・Bあわせて98%と、判定基準の80%を大きく上回った。入学時より朝学習に落ち着いて取り組むよう指導してきたことのほか、3年次には、就職希望者に対する面接指導を昨年度より1か月早い6月から開始し表現力の向上を図ったことや、進学希望者に対する補習を6月から12月まで毎日実施したことなどが要因と考えられる。 次年度は判定基準を現在より10ポイント高い90%とし、就職や進学に向けた指導をさらに充実させたい。
		1回目の就職試験における内定率が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	10月末における就職内定率を検証 1回目の内定率 91% 評価：A	1回目の就職試験(学校幹旋)では、受験した80名のうち、91%にあたる73名が内定し、A評価の判断基準である「内定率90%」を上回った。地元企業からはほぼ昨年同様の求人をいたなど恵まれた状況であった。なお、今年度も県内企業への内定者(55名)が多く、地元企業の担い手となる人材を社会に送り出すことができたことと考える。 次年度も現在の判定基準を継続し、就職希望の生徒が第一志望の企業に就職できるよう、適切な指導や支援を続けていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		○地域の小中学校ではGIGAスクール構想の実現に向けた取組が進んでいる。高校もしっかりと取り組んでほしい。 ○読書の取組を活活化させるために、学校での放送による名作の読み聞かせなどを行ってはどうか。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策		○一人一台端末が整備される令和4年度は、端末を日常の学習ツールとして深い学びの実現を目指す。 ○心に残る名作の読み聞かせを、「規範意識週間」の取組と連携して実施できないか検討する。		

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
2 心身ともに健康で逞しい(タフな)人づくりを目指し、部活動や生徒会活動の活性化に努めるとともに、規範意識を高め、いじめを見逃さない学校づくりに努める。	① 県高校総体・新人大会で団体・個人とも上位入賞を目指し、高体連表彰取組賞を獲得する。	県高校総体の総合得点が A 75点以上 B 60点以上 C 50点以上 D 50点未満	県高校総体成績(最終結果) 男女総合: 48.0点 評価: D	県高校総体の総合成績は、男女総合得点が48.0点(D評価)と、一昨年度の75.5点から大きく下がり、B評価の判断基準である60点に達しなかった。 県高校総体では、団体戦で剣道部2位、ソフトテニス部3位、卓球部ベスト8となり、個人戦で陸上部、剣道部、柔道部、弓道部、相撲部、ソフトテニス部が上位入賞を果たしたが、団体競技でのベスト8以上の減少が全体的な点数の低下の要因であると考える。 次年度は達成度判断基準をそれぞれ5点ずつ下げ、巻き返しをはかり目標を達成したい。
	② 文化部の重複加入を奨励し、各部の取組に生徒が積極的に活動し、より良い成果を収める。	文化部の活動と成果に満足しているか A たいへん満足している B おおむね満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 64% B: 35% C: 1% D: 0% 評価: A・Bあわせて99%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて99%と、判定基準の80%を大きく上回り、前年度(97%)と同様、非常に高い結果となった。感染症対策を行いながらも以前に近い活動ができるようになったことや、活動の成果を発表する機会が増えたことが要因と考えられる。 次年度は現在の判定基準を継続し、文化部の活動が活発になるよう取り組んでいきたい。
	③ 生徒会を中心にして行事への参画意識を高め、生徒が自主的に活動する行事にする。	生徒会行事に満足しているか A たいへん満足している B おおむね満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 57% B: 41% C: 2% D: 0% 評価: A・Bあわせて98%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて98%と、判定基準の80%を大きく上回り、前年度(97%)と同様に非常に高い結果となった。感染症対策を工夫しながら多くの生徒が満足できる生徒会行事を実施できたことが高い評価の要因と考えられる。 次年度は判定基準を現在より5ポイント高い85%とし、生徒自身が満足して参加できるような生徒会行事を引き続き目指したい。
	④ 規則やマナーを守り、思いやりの心を育むため、生徒への声かけや観察を行い、生徒との相互理解を深め、規範意識やいじめ防止の意識を高める。	本校の教育活動や規範意識向上の取組により、規範意識やいじめ防止の意識が A 十分身についた B 少し少し身についた C あまり身につけていない D 全く身につけていない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 79% B: 21% C: 0% D: 0% 評価: A・Bあわせて100%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて100%と、判定基準の90%を上回り、前年度(100%)と同様に非常に高い結果となった。毎学期に実施している「規範意識週間」の取組や、日々の「朝の挨拶指導」、「校内巡視」などの指導によって、生徒の規範意識やいじめ防止の意識が高まっているものと考えられる。 次年度も現在の判定基準を継続するとともに、これらの取組を充実させて規範意識の高い生徒を育てていきたい。
	⑤ 保健だよりや掲示物、集会、SH等を利用して、生徒の心身の健康管理についての意識の高揚をはかる。	自分自身の心と体の健康管理について、日頃から意識して生活しているか A 常に意識している B ある程度意識している C あまり意識していない D 全く意識していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 52% B: 42% C: 6% D: 0% 評価: A・Bあわせて94%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて94%と、判定基準の80%を上回ったものの、「A」と回答した生徒の割合は前年度(62%)から10ポイントも減少した。マスク着用や手指消毒といった「新しい生活習慣」が定着しているように見える一方で、新型コロナウイルス感染症への「慣れ」や、感染症対策への「疲れ」があるものと考えられる。 次年度も現在の判定基準を継続し、生徒が健康的な行動習慣を確立し、自らの健康管理を行えるよう支援していきたい。
3 社会貢献や環境に対する意識を高めるため、工業学習成果の提供やボランティア活動等を積極的にを行い、地域社会との連携を深める。	① 社会に貢献することの大切さや必要性を認識するために、地域ボランティア活動や校外での一日一善運動を推奨する。	地域ボランティア活動や一日一善運動を通して社会貢献の大切さを理解しているか A 十分理解している B ある程度理解している C あまり理解していない D 全く理解していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 67% B: 31% C: 2% D: 0% 評価: A・Bあわせて98%	生徒対象のアンケート結果は、A・Bあわせて98%と、判定基準の85%を上回り、前年度(98%)と同様、非常に高い結果となった。生徒会執行部・部活動がローテーションを組みながら毎日行っている「一日一善運動」(校舎の清掃や朝の挨拶運動など)、放送部による昼食時の放送での呼びかけ、「釜屋海岸ボランティア清掃」などを通して地域への社会貢献の意識が定着しているものと考えられる。 次年度も現在の判定基準を継続し、これらの取組を継続していきたい。
	② 環境保全のこれまでの取組を向上させ、ゴミ分別や環境保全が正しく行われているかを評価し、環境に対する意識の向上を目指す。	環境保全(ゴミの分別・節水・節電等)に取り組んでいる割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	生徒対象に 12月にアンケート調査 A: 59% B: 35% C: 5% D: 1% 評価: A	生徒対象アンケートの結果は、A・Bあわせて94%と、判定基準の80%を上回ったものの、前年度(98%)よりも4ポイント低くなっており、校内においても、ゴミの分別の不徹底など、一部の生徒の行動に緩みが見られる。 次年度も現在の判定基準を継続しつつ、保健指導課が中心となって行っている清掃指導だけでなく、生徒指導課の規範意識向上の取組等とも連携することで、環境保全や環境美化に関する生徒の意識と日々実践する力を高めていきたい。
4 教職員が相互に業務を点検し、組織的に業務の平準化を進め、働き方改革を推進する。	① 校務分掌ごとに業務の重複を点検し、整理に努めることで、多忙化を改善する。さらに、組織的な業務の平準化を進める。	各分掌内で主管する業務の見直しを行い、組織的な業務の平準化を進めることに A 十分努力した。 B ある程度努力した。 C あまり努力しなかった。 D 努力しなかった。	職員対象に 12月にアンケート調査 A: 18% B: 66% C: 13% D: 3% 評価: A・Bあわせて84%	職員対象のアンケートの結果は、A・Bあわせて84%と、判定基準の70%を上回り、前年度(83%)からも1ポイント上昇したものの、今年度前期(92%)からは8ポイント低下した。体験入学の延期などで2学期に行事が集中したことによる多忙感が背景にあると考えられる。 教員の働き方改革については「行き着いた感」があり、やや頭打ちになっているが、次年度も現在の判定基準を継続し、一つひとつの行事を見つめ直すことで業務の効率化・平準化を進めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		○生徒数に対して部活動の数が多過ぎなのではないか。精選が必要ではないか。 ○活動が低調な部活動が増えおり、休日をもっと部活動をさせてほしい。 ○働き方改革と両立しながらも、教員にはドローンなど先端の技術を身に付けて生徒を指導できるようになって欲しい。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策		○部活動の数については、生徒のニーズを踏まえながらも、精選も視野に入れ、適正な規模を検討する。 ○部活動については、働き方改革の取組にも配慮しつつ、県のガイドライン等に則りより一層の活性化に努める。 ○教員総合研修センターやポリテクセンター等の研修受講を促し、自発的に技術を高めていくよう働きかける。		